

氏 名	根来 麻子
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	第 5294 号
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学 位 論 文 名	上代における天皇即神表現についての研究
論 文 審 査 委 員	主 査 教授 村田 正博 副 査 教授 栄原 永遠男 副 査 教授 小林 直樹

論 文 内 容 の 要 旨

宣命と萬葉集における「天皇」に関する表現には二つの類型が指摘されている。「天皇」の血統の由来を神話に求める表現と、そうした説明なしに天皇を直ちに神として提示する表現で、この論文では、前者を「神話叙述」、後者を「天皇即神表現」と呼び分け、後者について考察を展開している。

第一章「宣命における「天皇即神表現」」では、宣命冒頭に多用される天皇の提示「現御神ト大八嶋国知ロシメス天皇」において、通例「現（御）神」に対して少数「明神」と記されるのを、養老令（公式令詔書式）が漢籍に典拠を有する「明神」を利用したのに従ったものと推定。「現（御）神」・「明神」とともに「アキツ（ミ）カミ」と訓む通説に対して、旧訓「アラミカミ」の復活を主張している。また、「大八嶋国所知天皇」（オホヤシマクニ シロシメス 天皇）に対して、「御宇（御宇倭根子）天皇」と表記された例について、通訓「アメノシタ シロシメス」ではなく、「オホヤシマクニ シロシメス」と訓むべきだと主張している。

第二章「和歌における「天皇即神表現」」は、萬葉集を通しての考察。「大君は 神にしませば」について、要因を示す接続助詞「ば」の確定条件用法によりながら、強意の助詞「し」によって、「ば」の後件（結果：超人的行為の実現）よりも前件（要因：神性の確認）「神にませ（す）」に主眼が置かれると捉えようとしている。ついで人麻呂にのみ見える「神ながら 神さびせす」について、内面・外面という相対する二つの視点から対象を捉えるもので、「神ながら」（神性）・「神さぶ」（行為）という既存の語句によりつつ、上記「大君は 神にしませば」と揆を一にする人麻呂独自の表現と捉えようとしている。さらに「明津神（あきつかみ）我が大君」（巻六・1050、田辺福麻呂、讃久迩新京歌）について、従来、養老令詔書式・宣命の「明神」の借用と見て、問題ともされてこなかったが、宣命のは「アラツカミ」だとする立場（第一章）から、宣命よりの借用ではなく、漢語「明神」を踏まえて、明察の主君の叡慮の結果として久迩京への遷都を言祝ぐ趣意をこめたと主張。作者田辺福麻呂の評価を新たにすべきだと提案している。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

「天皇即神表現」を取り上げ、宣命と萬葉集が有する古代表現の特性を明確にしようとする試みで、従来、ともすると超時的イデオロギーの側面から言及されることの多かった問題の幾つかを、古代特有の表現の問題として提示するところにこの論文の趣意がある。考察の対象を「天皇即神表現」に限定したことで、叙述の輻輳を避けることには ある程度 成功している反面、考察の対象とする「天皇即神表現」が本来有したはずの多様な側面を単純化することにもなっており、論の射程を限定しかねぬ憾みを生じた面もある。今後、論者の言う「神話叙述」とも相俟って考察が深められるならば、本論文はいっそうの信憑性を獲得することになると期待される。

第一章、「明神」（訓「アラミカミ」）・「御宇」（訓「オホヤシマクニシロシメス」）についての主張には聴くべきところがあるが、この方式によると、類字の文字列に「WX」・「YZ」等、いかなる表記が現われても、通用される一つの古訓と同定されてしまう危惧もあり、やはり、それぞれの文字に対する厳密な訓詁によって支持されることが常に必要かと思量される。

第二章は、主張するところ、おおむね肯綮にあたり、既発表の論文として、学界でも相応の評価を得ているものである。この上は、これらの倭歌における表現がいかなる場において機能したものであるのか等、実態のいっそうの掘り下げが期待される。

以上の所見により、本論文は、大阪市立大学 博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。